

## 少しずつの変化

代田中・3 赤木 獅

僕は、マイペースな性格だ。家族からもよく

「やるのが遅過ぎる。」

と言われるけれど、自分でもそれは自覚している。夏休みの間も、毎日何かしらやらなければいけないことがあるのに、ついだらだらしてしまふ。

僕は、片親の男三兄弟の長男だ。家では、やらなければいけないことがたくさんある。それを全部背負うのは正直しんどい。それを言い訳にして、つい弟たちに頼ってしまう自分がいる。

夏休みは受験勉強も本格的になってくる時期だ。学校だけでなく塾からも、課題や模試の過去問が出されていて、やるべきことが山ほどある。それでも、気づくとスマホをいじったりごろごろしたりして、勉強から逃げている自分がいる。

弟たちは、家の手伝いも一生けん命やっている。だけど僕は、「自分にはやるべきことがあるから。」

と言い訳をして、家のことは弟たちに任せてしまうことが多い。そんな自分が少しずるいなと思うことがあっても、なかなか変えられない。

でも最近、少しだけ変わりたいと思い始めた。

ある日、自分以外のみんなが忙しそうにしているのを見て、みんなは、お互い支え合って生活しているのに、これでは僕はみんなの支えの上で呑気に何不自由なく過ごして、現実から逃げているだけだと気づいた。なんだか、胸がぎゅつとなつた。自分も手伝えることがあるはずなのに、見て見ぬふりをしていた自分が急に恥ずかしくなつた。それと同時に、受験のことも頭に浮かんだ。中学三年生

になり、勉強のプレッシャーも少しずつ感じてきている。しかし、自分のことばかりに集中していて、家族のことを全然考えていなかったのはどうなのだろう。逃げてばかりじゃいけない。そう思った。

夏休みの後半、僕は一つ小さな決心をした。

「毎日、朝三十分だけ早く起きて、まずは家のことを一つやってみよう。」

最初は面倒くさくて、正直に言うとは度もさぼりそうになつた。しかし、少しずつ慣れてくると、手伝いをするのが自分の当たり前になつてきた。洗濯物を取り込んで、クローゼットにしまつたり、ゴミ出しを忘れずに行ったり、風呂の掃除をしたり。そんな小さなことでも、

「最近ちゃんと動けてるじゃん。偉い。」

「獅、ありがと。ほんとに助かる。」

と、母も弟たちも言ってくれた。それがうれしくて、もっとがんばってみようと思えた。

もちろん、まだ完璧とは言えない。すぐにだらだらしてしまうこともあるし、母に注意されてから動くことも多い。しかし、自分の中で確かに何かが変わり始めているのを感じる。少しでも成長したい。そんな気持ちがある今の僕の原動力になっている。最初は、長男だからという気持ちがあったが、今はそれ以上に、自分もこの家の一員なのだ、という責任を感じるようになった。

以前の僕は、やるべきことからすぐに目をそらしていた。勉強も、家のことも、どうせ自分には関係ないと決めつけて、言い訳ばかりしていた。だが、少しずつでも行動してみると、母や弟たちがいかに大変だったかに気づく瞬間があった。たった一つの皿洗いや、たった十五分の勉強でも、それが積み重なると大きな変化につながる。今の僕には、明確な目標がある。第一志望の高校に合格すること。そして、家族の支えになれる存在になること。どちらも簡単なことではないけれど、そのために毎日少しずつ努力することが、今の僕

のやるべきことだと思っている。

母は何も言わないけれど、僕が変わろうとしていることに気づいてくれているような気がする。そんな母の思いに少しでも応えたい。これからも、だらけたり、うまくいかなかったりする日があるかもしれない。でも、もう逃げない。何かをやると決めた自分を、ちゃんと信じていきたい。長男として、受験生として、一人の人間として、少しずつ前に進んでいきたいと思う。

この夏休みは、僕にとって、ただの長い休みではなかった。むしろ、自分の中にあつた甘えや逃げたい気持ちと、本気で向き合うことができた、かけがえのない時間になったと思う。今まで、なんとなく過ごしてきた毎日の中で、自分がどう生きたいか、どう在りたいのかなど、考えたこともなかった。でも、母や弟たちの姿を見て、自分の無責任さに気づき、小さな一歩を踏み出す勇氣をもてたことは、僕にとって大きな意味があつた。完璧ではないし、まだまだ課題もたくさんあるけれど、変わりたい、と思えた自分の気持ちには本物だと思う。この夏に始まった変化を止めずに、これからも毎日を大切に積み重ねていきたい。そして、来年の今ごろには、  
「あの夏をきっかけに、自分は少し強くなれた。」  
と、胸を張って言えるようになりたい。